

聖マタイによる福音書第5章1～12節
 於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

イエスさまが宣教を開始されると、その評判はガリラヤ地方のみならず、シリア中に広まったとありますから、遠く異邦人の地にまでイエスさまの噂は伝わっていったのでしょう。宣教の内容は、「天の国は近づいた」という福音の宣言と、その徴である癒しの業でした。そこで、様々な病を患っている人々が、これもガリラヤだけではなくユダヤからもエルサレムからも、そしてヨルダン川を超えた異邦人の町デカポリスからもぞくぞくと押し寄せてきたのでした。

その大勢の群衆を背後に見ながら、イエスさまは弟子たちに教えを述べられました。それがマタイ福音書の5章から7章にかけて記されている有名な「山の上の教え」です。「山上の説教」、古くは「山上の垂訓」と呼ばれていました。イエスさまの弟子たるものはどのように生きなければならないか、弟子としての生活のあり方、或いは目標と捉えることもできるかもしれません。イエスさまに従う生活は、どのように組み立てられていかなければならないかを、教えられたのでした。

この教えは、わたしたちにも無関係ではありません。無関係でないどころか、わたしたちもこの教えに従って、毎日の生活を送っていくことが求められているのです。しかしながら、ここに語られていることはクリスチャンとしての理想的な姿が描かれているのであって、自分の現実からはほど遠いし、文字通り実行することはとてもできることではないと、初めからギブアップしてしまう方も少なくないでしょう。

或いは、イエスさまの言わんとすることを自分に都合良く解釈して受け止めようとする誘惑も生まれてきます。この教えは聖人や修道士のような特別の賜物を与えられている人たちに要求されていることであって、わたしたちにはもっと緩やかな別の信仰者としての生き方の基準があってしかるべきではないか、と思いたくなるのです。どうしてそうなるのでしょうか。それはイエスさまのこの教えを倫理或いは道徳律として捉えようとするからです。

確かに、山の上で弟子たちやその背後にいる群衆に教えを説くイエスさまの姿は、神さまから律法を授かり、それをイスラエルの民に与えたモーセの姿を彷彿させるかもしれません。そこから、イエスさまの教えは、神さまを信じる人たちの、こうあるべきだ、このようになすべきだ、という姿を描いていると受け止めるのです。もし、

そうだとすれば、それは重い義務としてわたしたちの上にのしかかってきます。モーセの律法に替わる新しい律法として、この教えをその通り守らなければ、わたしたちはクリスチャンとして失格だということになりかねません。しかし、イエスさまは新たな義務を弟子たちに課したのではなくて、御国の福音を告げ知らせたのです。

山上の説教の中には、イエスさまのみ言葉として次のようなものが伝えられています。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(5:17)。ここにはイエスさまの使命は、神さまとイスラエルとの古い契約を反古にすることではなく、完成することであるとされています。しかし、その仕方は新たな律法を制定することによってではありません。十字架と復活によるのだということを、わたしたちは常に心の内に留めていなければなりません。

さて今日の福音書は、この山上の説教の冒頭の部分です。「幸福(さいわい)なるかな、心の貧しきもの。天國はその人のものなり」という文語の聖書で覚えておられる方もあるでしょう。「幸福なるかな、」で始まる8つの祝福の言葉が記されていますので、この箇所は「真福八端」と呼ばれています。まことの幸福の8つの基が教えられています。原文でも、この「幸福なるかな」が文の最初に置かれていますので、文語訳はそれを正確に訳し出していることになります。おめでとう、という祝福の言葉から始まるのです。幸せになるために、心を貧しくしなさい、悲しみに浸りなさい、柔和を身につけなさい、というわけではありません。

わたしたちが人生を生きていくときに、不幸な人生などは誰も望みません。幸せに生きたい、幸福な人生を送りたいと願います。人の一生を振り返って、貧しくはあったけれども夫婦仲良く、暖かな家庭に恵まれて幸せな生涯だったとか、自分の望んだことは何もかも実現出来て、幸せな奴だったとか、言うことがあります。これは、その人の人生を肯定する言葉です。その人の生涯が満足のいくものであり、恵まれたものであったことを言い表しています。幸せというのは、自分も周りも満たされて、納得が出来るような人生を送った、生きてきて良かったということです。

幸せな人生を送るということは、人生を生きていくことに意味を与えられることです。生き甲斐のある人生を過ごすことです。生きていくエネルギーも、幸せを目指すことから生まれてくるのです。幸せになることが人生の目的であると考え人は多いし、誰もが幸福な人生に満足を見出そうとするのです。

しかし、イエスさまの幸いの教えは、自分の人生を肯定するために、幸せを得るために、こうこうこうしなさいと勧めているのではありません。幸せになるためにはどうしたらよいか、などということではなくて、今、幸いだ、おめでとう、というのです。

おめでとう、心の貧しい人たち、何故ならば、天の国はその人たちのものだから。おめでとう、悲しんでいる人たち。何故ならば、慰められるからだ、というのが、この幸いの教えなのです。だから、教えというよりは、幸いがここにやってきている、あなたの方の中に幸いが運ばれてきているという宣言が、この言葉です。

今日はこの6番目のみ言葉、「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る」に注目したいと思います。

わたしたちは自分の心が清いとはとても言うことができないために、もし今のこの心の状態で神さまにお目にかかるようなことがあれば、神さまの聖さの前に耐えられないのではないかと恐れます。

イザヤは預言者として召命を受けたとき、「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た」と言って恐れおののきました。イザヤが滅ぼされずに使命に生きるようになったのは、セラフィムが火箸で祭壇から炭火を取ってイザヤの唇に触れたために、咎が取り去られ罪が赦されたからでした(6:5～)。

同じように、わたしたちも心を清めていただかなければ、神さまを仰ぎ見ることはできません。一方では、聖なる神さまに見えることに畏れを感じながらも、他方、神さまと親しく顔と顔を合わせて語り合いたいという渴望も、わたしたちの心の内に沸々と湧いてきます。わたしたち一人一人をお造りになり、命を与え、慈愛をもって支えてくださるお方にお目にかかることができれば、それ以上の幸いはありません。人生の矛盾も疑問も解き明かされ、またそれによって流した涙も拭いていただければ、生きてきて本当によかったと、心から感謝できるようになるのです。神を見る、それは人生の目的でもあるのです。

旧約の詩人はこのように歌いました。「涸れた谷に鹿が水を求めるように、神よ、わたしの魂はあなたを求める。神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつみ前に出て、神のみ顔を仰ぐことができるのか」と、熱い思いを注ぎ出しました(42:2～3)。

また、義人ヨブは様々な不幸が自分を襲った時に、自分は正しいのに、何故、神さまによって打たれなければならないのかと不条理苦しみました。それでもなお、次のように言っています。「わたしは知っている、わたしを贖う方は生きておられ、

ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも、この身をもってわたしは神を仰ぎ見るだろう。」そう言って神さまを見ることに希望を繋いだのでした(19:25)。

神さまを仰ぎ見ることを赦されるのは、心の清い人です。教会の歴史に於いては、古代より神さまとの出会いを求めて、心を清くするために多くの人々が修道士となって砂漠に出て行き修行を積みました。その伝統は現代にまで連綿と続いています。そして恵まれた修道士は、神さまの光が自分の冥(くら)い所を照らし出し、闇を光に変えるという経験をしたと言います。神さまの照らしに浴して、神さまへの目が啓(ひら)かれる恵みを味わったのでしょうか(『聖なるヘシュカストのための弁護』解説)。

1994年に亡くなったのですが、生前は現代の聖人と言われた修道士が、ギリシャ正教の聖地アトス山の修道院にいました。長老パイシオスという人物です。日本人のある東方教会の霊性の研究者が、その修道士に会ったときの印象を書き留めています。一瞬、視線を向けられたその目は、乳児にじっと見つめられた時の目だと言うのです。「長年の苦行と祈りのすえ、真理に到達した悟りの目は赤ちゃんの目でした」と書いています。見えるものがすべて驚嘆の対象として映る。一瞬一瞬が驚きに満ちている。存在の不思議さに開かれた目だと言っています(『祈りの心身技法』)。

心の清さというのは、汚れを取り除いて清くなるというよりも、驚きの心を持つことではないでしょうか。何の驚きもなく、感動も感激も湧かなくなってしまう心というのは、物事を欲得とその計算だけでしか、見ることができなくなってしまう心なのではないでしょうか。世渡りは、人一倍上手かもしれませんが、肉の目には見えない世界からは、最も遠くにあるとしたら残念なことと言わなければなりません。

わたしたちは、毎朝、毎夕の礼拝の中で、「主よ、わたしたちのうちに清い心を造り」「聖霊によって支えてください」と唱和を唱えて祈ります。詩編51編のみ言葉です。過ちと汚れに満ちた現実の姿ばかりに目を向けて、そこに捕らわれるのではなくて、むしろ神さまの光に目を向けるのです。そうすることによってマイナスの現実も、聖霊の賜物によって清い心に新しく造り直していただくのです。変容させていただくのです。

アトスの修道士も自分の努力で赤ちゃんの目を、清い心を獲得したのではないでしょう。聖霊の働きに委ねることを学んだのです。そこに至るための信仰の修行を積んだのです。

聖週に歌います有名な聖歌に、「血潮したたる主のみ頭」という曲がありますが、その4節に次のように歌います。「主よ、主のもとに帰る日まで、十字架の影に立たせたまえ。み顔を仰ぎ、み手によらば、いまわの息も安けくあらん」(145番)。

わたしたちにも、顔と顔を合わせて主を仰ぎ見る時がやってきます。イエスさまの十字架が、その道を開いてくださった。わたしたちの心を、清いと認めてくださるためです。そのみ業を感謝し、希望に満たされて毎日を送って参りたいと思います。